

高校卒業までに、自らの生命現象を考える機会を！

保育士の卵たちへ、ヒトも自然界では一つの生命体であり、宇宙誕生からの延々と続く生命、その一つとしての人としての誕生の仕組み、誕生までの生命体の営み、等々をまず理解して欲しく、こうした生命の営みの前では、障害がある、ない、ということはどれ程の意味があるのかと語りかけている。

その授業の感想の中に、「障害児は、何か問題を持つ親から生まれるものと思っていた。」、「特別なことでなく、自分にも障害のある子どもが生まれる可能性のあることを初めて知った。」、「自分の誕生は奇跡に近いことを知り、健康に生んでくれた両親に感謝したい。」という感想が少なからずあった。

話したい内容を理解してくれていることはいいのだが、高校卒業で、障害をこの程度理解ということは、自らの命、障害のことを、小・中・高校それぞれではどう理解させようとしているのだろうか、疑問が生じて来た。

学校ではボランティア活動を奨励し、障害の体験学習、また、交流学习も行われ、地域の学校への障害児通学も多くなってきているが、障害児・者を特別な、特異なものとしか見ていないなら、いくら社会として障害児・者を支援、援助、理解しようといっても、真の理解には繋がらないような気がする。

たまたま、専門学校や大学で障害関連の授業で学ぶ機会のある学生は理解する機会はあるが、こうした機会のない生徒・学生はどういう大人になるのだろうか。

この程度の理解では、結婚して障害児が生まれると狼狽え、被害者意識をなかなか乗り越えられないのは仕方がないかなと思えて来る。

いくら障害児に接しても特別な存在と見ているようでは、時流の「共に生きる社会」、「共生社会」なんて、絵空事に過ぎないような気もしてくる。

高校進学率は100%（h15度 97.3%）に近い現代なのだから、まずは、生命現象の前では生命体として共有の存在であることを気づかせ、そこから思考させる授業に取り組んで欲しいと思う。（車いすの介助の仕方、等々のマニュアル的なものは、その後でもいいような気がする）。

それには、まず教師一人一人が、どういった生命観を持っているか、また、持とうとして生徒たちと語り合っているかが問われると思うのだが.....。

（2005年4月29日 記）